

「出会い」の幸福

幸福とは何か。人さまざまの幸福があるだろうが、私は「出会いの幸福」にまさる幸福はないと思う。生涯のある時、ある人に出会ったという「出会い」こそ、人間形成の決定的要素であり、人生を織りなす糸そのものである。対話の相手を見出し、交わりの対象に出会うことが出来たとき、孤独な人間はしみじみとした幸福感に満たされる。

内村鑑三（1861～1930）の言葉に、「生命の夕暮れになればなるほど、人は何ものか、彼の心の奥深き所に結実しつつあるを感じる」というのがある。戦争世代としては思わぬ長寿を恵まれて、今や「生命の夕暮れ」にたたく私にとっても、「心の奥深き所に結実しつつある何ものか」があるとすれば、それは、良き人、良きものとの「出会い」以外の何ものでもないと強く思わせられている。

「出会い」の諸相

人はさまざまな「出会い」をもつ。その中から典型的と思われる出会いのいくつかを、思いつくままに数えあげてみよう。

「真の師に出会うことは人生30年をもうけることだ」（ジャン・ギトン）と言う。師事するとは、弟子（disciple）として師の訓練（discipline）を受けることである。それは、人を真の意味で謙虚にするとともに、人を真の練達へと導く。人の内的可能性は師との激しい人格的交流によって絶えず触発されるからである。そこに強固な傾倒の精

神が生まれていく。道元は「良師に会わざれば学ばず」と言ったが、現代に最も欠けているのはこの強靱な精神(M・L・キングのいう *tough mind*) ではないか。傾倒の精神のない所に個人 (*individual*) の確立はないのである。

青春は友情の季節である。若き日に人は多くの友に出会う。そして「メロスとセリヌンティウス」の美しい「男の友情」 (*amitie masculine*) に感激する。「友はいずれの時にも愛する」 (箴言 17 : 17) と言うが、真の友とはどのような友をいうのであろうか。友情をつなぐ絆は何か。名篇「走れメロス」を書いた太宰治は、そのわずか3か月前に「駄込み訴へ」を書いた。それはユダの裏切りの話であり、愛と信頼を求めて挫折した人間の悲劇である。友との出会いは人間への限りない信頼と、同時に信じきった友をすら疑う瞬間があるという人間の弱さ、もろさを人の心に深く刻みこむ。

聖書は、神は人を「男と女に創造された」と告げる。それは人が本来孤独であることのしるしであり、「人が独りでいるのは良くない」のである。それゆえ、求めるベター・ハーフに出会ったとき、人は「ついに、これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」と叫び歌う。(以上創世記 1 ~ 2 章から) それは、彼(彼女)の中に単なる性とパンの伴侶に止まらず、一つの生を共に頒け合っ
て生きる人生の同行に出会った者の歡喜の声である。実に、「だれが賢い妻を見つけることができるか。彼女は宝石よりもすぐれて尊い。夫は心から彼女を信頼している」 (箴言 31 : 10 ~ 11)。

古代ギリシアの哲学者アルキメデスは、風呂の中で「アルキメデスの原理」と呼ばれる浮力の法則を発見したとき、喜びのあまり裸のまま外にとび出し、「*Eureka*

カ、ヘウレカ」(我、発見せり)と叫んだと言う。また孔子は、「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」(論語)と言っている。いずれも真理を求めて、ついにそれを発見したときの喜びの端的な表現と言えよう。イエスの語られた「隠された宝と良い真珠のたとえ」(マタイ 13:44～46)も、同じ消息を伝えている。後者のみを引く。「商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う」と。

ところで、アルキメデスが叫んだ「ヘウレカ」とイエスの話の中の「見つける」は同じギリシア語の動詞で、新約聖書中 170 回程も用いられている重要な語である。もともと「(一所懸命に探して、ついに)発見する」(マタイ 7:7)という意味で、殆どの場合「見つける、見出す」と訳されるが、ヨハネ福音書第 1 章後半 35 節以下に記されている「イエスの最初の弟子の召命」物語においては、4 回の使用がすべて「出会う」と訳出されている。「イエスが弟子たちに出会った」(43)、「弟子たちがイエスに出会った」(41、45)、「弟子たち(どうし)が出会った」(45)と。まことに息もつかせぬ劇的な「出会い」の連続である。日本語聖書は、この名訳をもって、聖書中でもすぐれて文学的なこの一編に花を添えている。

「出会い」の本質

人は「誰それに道でばったり出会った」などと言う。しかし、人生の出会いは、それがばったりであれ、綿密に計画されたものであれ、人の一生を一変してしまうような圧倒的な経験であり、人に全く新しい世界を開示す

るものであり（新しい言語の習得はその好例）、従って人の価値観に決定的な転換をもたらすものである。

しかしそうだからと言って、出会いはいつも劇的なものとは限らない。いやむしろ真の出会いは、しばしばもっと地味で日常的なものである。人は、たとえば夫婦間のように、何年も生活を共にして初めて「出会う」こともあり、人生の道にふと立ち止まって越し方・行く末をめぐらす折に、誰彼との出会いを今初めてののように実感することもある。出会いはその意味で、一期一会であり、忍耐と寛容の持続的経験でもある。

ところで、「出会い」（*Begegnung*）という語は、とりわけM・ブーバー（1878～1965、主著『我と汝』）の世界を示すものであろう。彼によれば、「我」は客体としての他人に出会うのではなく、どこまでも一個の実在者としての「汝」に出会う。「汝」は「我」が全身全霊をもって相対していなければならぬものである。この「他者」の経験が、人をして自己自身（*self*）に出会わしめることになる。若き日に人生に開眼し、生きる意味を問い、生きがいを追求し、就職や結婚など生涯のさまざまな分岐点に立って選択と決断を遂行していくときに、人は高度に精神的な「出会い」、すなわち「自己の発見」を経験するのである。前述の真理との出会いもこれに通底するものであろう。

ブーバーは自分の思想の遍歴を、高く狭い尾根を伝わって歩を進める登山になぞらえて次のように言った。忘れられない珠玉の一文である。「わたしは、絶対者について数々のたしかな説明をそなえた[体系という平原]に憩ったことはない。いや、わたしの行く手はいつも深い溪谷を左右に見下す、せまい岩だらけの尾根ばかりで

あつた。こうした尾根にいるものは、絶対者についてはっきりと説明することはできない。いやこの尾根にいてたしかなのは、ただ、まだだれにもあらわされないでいるなにかと出会うということだけである」（『人間とは何か』より）。

この「絶対者」を自分の問題意識である何という語にでも置き換えてみるならば、「出会い」こそ、まさに人生を生きる勇気の根元であることに思い到るだろう。「まだだれにもあらわされないでいるなにかと出会う」という期待に胸をふくらませ、それに向かつて傾倒していく（commit myself to）姿勢こそ、ことば本来の意味で「信仰」と呼ばれるべきものであり、人生の虚無に打ち勝つ力である。

その対象が何であれ、真の出会いを経験した者は、その経験の中で、自分の存在意義の根拠は決して自分の中に見出すことはできず、ついに「他者」の中に、他者との「関係」の中にしか見出しえないことを悟る。「汝」は「我」が見出したのではなく、「我」に与えられたものなのである。そこに自ずから「邂逅の謝念」（亀井勝一郎、出会えて有難いという思い）が湧きおこる。その間の消息を、親鸞は「遇い難くして今遇うことを得たり。聞き難くして既に聞くことを得たり」（教行信証）と言い、イエスもまた有名な「失われたもののたとえ」（ルカ 15）の中で明らかにしておられるのである。

その話は「見失った羊を見つけた、無くした銀貨を見つけた、いなくなつた息子が見つかった」というものである。言うまでもなく、この「見つけた」は前述の「ヘッリスコー」、すなわち「出会う」という語である。これらの話の中で大切なことは、羊も銀貨も息子も「見つ

けられた」、すべて受身形であることである。「羊と銀貨と息子」が私どもに、「羊飼いと女と父親」が他者（イエスあるいは神、ブーバーのいう「絶対者」）に擬せられるとすれば、私どもは他者によって見つけられるのだ。こちらから出会うというより、あちらから出会って下さる（ヨハネ 1:48 参照）というのである。

聖書の告知によれば、人はすべて「罪」（神と人との間のあるべき関係の断絶の状態）の中に失われているのである。それゆえ、人の「自己の発見」も「さまざまの出会い」も、まずは彼自身があるべき本来の場において見つけ出されること、言いかえれば「神と出会って」、あるべき関係が回復されることなくしては有り得ない。この人間に対して、神は自ら向こう側から来たって「出会って下さる」というのである。そして見つけ出したことを喜び、その喜びを私どもに頒け与えて共に喜んで下さるというのである（ルカ 15：5・9・32）。これが聖書の告知する「福音」（喜びのおとずれ）である。

「出会いの幸福」の極致はここにある、と私は信じている。

【付言】私どもの小さな聖書勉強会が、この4月で満14年になります。東京YMCA英語学校のバイブル・クラス時代から引き続き長期間参加、応援して下さっている会員皆様の友情に心から感謝申しあげます。

感謝の第一は、何よりも皆さんに出会えたということです。いや、皆さんが私に出会って下さったということです。私のように非力無名の人間のクラスに、皆さんが参加して下さるということは、私にとって思いもよらない幸福な出会いです。

感謝の第二は、私が若き日に英語と聖書に出会うことができたことです。（旧稿「人生派の英語」、「聖書と私」をご参照下されば幸いです）

感謝の第三は、今もなお、この英語と聖書をもって、少しく「キリストの福音」に仕えることができることです。キリストの福音に出会ったとき、私に一つの密かな願いがありました。出来れば、いわゆる宗教とは別のところで聖書を講じたい、と。家の集会で、学校で、そして皆さんとの勉強会などで、それが叶えられて、私は「出会い」の幸福を心から有難く思っています。

（2010年4月）

（所載）「バイブルクラスに寄せて 15周年記念文集」

2010年7月